

学校図書館 Take Off! No.12



八王子市では平成二十二年度に学校図書館サポーター事業が始まりました。司書一名を含む四名のスタッフで市内小中学校一〇八校を五年をかけて巡回するという計画を、驚きと期待をもって見守ってきました。翌二十三年には全校の蔵書のデータベース化が始まり、今年度には中学校蔵書の背ラベル整備や六名の派遣サポーター（読書推進担当の学校司書だそうです）が採用されるなど、第二次「読書のまち八王子推進計画」が少しずつ現実のものとなっていきます。

ところで、学校図書館をめぐる社会状況はどうなっているのでしょうか。現場の先生方や司書の努力で学校図書館への人の配置や探究型学習への取り組みが進んでいます。学校司書法制化の動きも、賛否はあるものの課題として議論が始まりました。その一方で、学校司書の雇用条件が悪化しているところもあると聞きます。

昨年夏の本会講演会で、講師の桑田先生が仰った「現代は『知識基盤社会』（中教審）であり、知識には国境はなく、グローバル化が一層進む。学校教育が目指すのは、グローバル化の浸透に対応できる子どもたちの育成」という言葉が思い起こされます。これからの子どもたちを育成する環境としてスタートラインに立った八王子の学校図書館。名実ともに『学校教育を支える機能』が発揮されることを期待してやみません。

八王子に学校図書館を育てる会広報紙

二〇一三年三月十五日発行 第十一号

子どもゆめ基金助成事業

「子どもの本、もっと広く、もっと深く」

平成二十四年八月二十六日 八王子市立中央図書館にて

講師 広瀬 恒子 さん

児童書の出版点数は毎年ほぼ三千点（そのうち絵本は一千点ほど）にも上るといふ。この膨大な玉石混交の作品の中から、子どもたちに手渡すべき本を選び出すのは至難の業だ。学校図書館に関わる者として、それ以前に親として、自分の選択は正しいのかと気持ちが揺らぐ。そんなとき私は、広瀬恒子さんの眼をお借りすることになっている。親子読書地域文庫全国連絡会（「おやちれん」と略称される）の会長として長く子どもと本を結ぶ活動に関わり、多くを読み込んできた選書眼。加えて世相が



子どもたちにどう影響し、また児童文学にどう反映されているのかを分析し、その時々の問題点を指摘し続けてきた広瀬さんの視点をよりどころにして彼の距離を測るのである。

「子どもゆめ基金」のおかげで、今年度も広瀬さんをお迎えすることができた。今回も、熱く（会場がたずを呑む）、ユーモアをもって（同意のうなずきが広がる）、ときにはバツサリ切り捨てながら（会場大爆笑）、多くの本をご紹介いただいた。

最後に、教師であれ司書であれ、地域で自発的に活動するボランティアであれ、子どもと本を結ぶときには、どういう風な子どもも観をもって、どういふ本の見方をしていくのかが問われるとし、『雨上がりのメデジン』（アルフレッド・ゴメスセルダ 鈴木出版）に登場する図書館司書マールさんを挙げられた。「子どもの気持ちをよく見通し、それが結果、本との出会いとなった。現実としては難しいが、それでも子どもへのあたたかい対応に心打たれた」根源的などころで共感すると締めくくられた。

来年度もお迎えしたいと願っている。次回は是非一緒に。
（松下貴子 記）

八王子に学校図書館を育てる会創立10周年記念講演会
講師 金田一秀穂氏 『国語辞典の世界』

昨年十二月一日、本会創立十周年を記念し、杏林大学教授、言語学者でありメディアでもおなじみの金田一秀穂氏をお迎えして講演会を開催しました。今回は参加された方から頂いた『印象記』を掲載します。

講演冒頭にかかげられた「種知」という言葉。聞き覚えの無い単語ながら耳に馴染み、きつと文字通り知の種播きという様な意味かな、などとこの言葉を反芻するうちに気がつけば先生のお話にグイグイと引き込まれていました。

とりわけ印象に残ったのが『はじめてのおつかい』に関するお話。言葉を覚えてからの幼児は自分の見聞きした物事をそのまま即言語化するので言葉と自分の思いとはイコールだが、成長して五才頃を境として自分の思いと言う事とは違って来るのだ、と。“ひとり言”の意味などにも触れながら子供の成長過程と言葉との関係はこの物語の中から読み取るうとする切り

口は実に新鮮で、常日頃悩まされ続けるコトバというやつかいな代物の、その本質を考える上で重要な示唆を頂いた様な気が致します。

講演の後、時間を経てから新たに気になって来たお話は、「夜話」という言い回しで子供への読み聴かせの重要性について説かれていたくんだり。自身身でかみ砕いた言葉での語りだからこそ子供の心の奥底に伝わり記憶されるのだという事が、「夜話」という素敵な言葉とともに深く胸に染み入って来た気が致します。一体いつ「国語辞典」の話につながるのだろうなどと中盤ふと思った私ですが、終盤での、前と後ろ、右と左の説明の難しき、間(あいだ)とは何かなど次々と発せられる質問そのものに将に目からウロコ。気がつけば辞書というテーマを越えて、言葉について意味について考える

事自体に重要な意味が在るのだという強いメッセージを発しておられるのだという気がして参りました。

あの会場で播いて下さった沢山の種を大切に育ててゆきたいと思うものです。本当に有難うございました。

(八王子市在住 鎌田純穂さん)



勇気のである絵本・自信をつける絵本「とべバツタ」

田島征三作・偕成社

「自分は透明な存在である」という少年の言葉が私の心にずっとひっかかっていました。自信がなく、自尊心、自己肯定感をもてない児童や生徒や大人（私も含め）は現在も少なくないように思われます。こういう気持ちを見事に払しょくして、元氣や勇氣を与えてくれるのがこの絵本「とべバツタ」です。

毎日「びくびく」して生きていたバツタは「びくびくしてくらしていくのがいやに」なります。この部分は多くの読者に共感呼び起こします。じゃあどうするか？それが大問題です。「けつい」はしたものの墜落寸前になってしまうバツタ。その切羽詰まった状況で何とバツタは自分についている四枚の羽に気づくのです。そして必死で自分の羽を使って飛ぶ練習をします。周囲に馬鹿にされても気にしません。自分で自分の力に気づき自分で飛び立ったのです。文章表現が力強いのみならず、何ととっても、田島 征三さんの大胆な絵がそれは、豪快で小気味いいのです。

新学期、新しい気持ちでスタートする時にぴったりの絵本です。

(大島真理子)

(表紙画像の掲載は

出版者の許諾を得ました)



「教室での読みきかせ」会員のおすすめ絵本

『おれはティラノザウルスだ』(宮西 達也作)
『へびとトカゲ(科学のアルバム)』(増田 辰樹著)

氷川小図書館の学校司書となり、半年が経過しました。中学校の司書教諭だった私にとって、はじめての小学校体験は、日々新鮮で、楽しいものでした。

とくに、読み聞かせ体験は、学校図書館に関わる大きな喜びの一つになりました。低学年の図書の授業、図書室で『おれはティラノザウルスだ』(宮西 達也作/ポプラ社)を、初対面の挨拶がわりによみました。大成功でした。つぎは、『へびとトカゲ(科学のアルバム)』(増田 辰樹著/あかね書房)をとりあげました。大成功?というより、おおさわぎでした。小学生たちとのコミュニケーションが深まりました。

このつぎは、何を讀もうかなと、在架の絵本を物色するうちに、絵本に開眼させられました。「何を今さら!」と思われる方もきっと多いことでしょう。お恥ずかしい限りですが、この年(還暦を数年過ぎてます)になって、この自分の発見に、喜びを覚えるのです。「男性には男性の良さがある。人それぞれの『読み聞かせ』がある。」と、励ましてくれる仲間の言葉に、おおいに張り切って、これからも取り組んでいきたいと思っています。(子どもたち、お覚悟を!)

(島崎滋)



先日M中学校の図書室を参観した。学校図書館としての評価や感想は他の人に譲って、以下はそこで触発された私の感想である。

書棚に雑誌『ニュートン』があった。かねてからこれは相当な素養のある人が見るものと思っていた私は、中学校でこれを見つけて少し驚いた。実際にはこの雑誌は年少者でも読めるように編集上の工夫があるという。驚く場面ではない。小学生でも、物語には興味を示さず本の形をしたものは凶鑑しかみない子が、学級に一人や二人は必ずいる。物語も好きだがそれだけでなくという場合を含め、科学の解説や資料が大好きという子は珍しくない。中学生になると自然科学とその技術に傾斜する子ほもつといる筈だ。『ニュートン』を図書室におくのはすぐれた配慮である。しかし一般的には科学の本への理解はまだ不十分なような気がする。

戦前に育った人たちが懐かしむ昔の『子供の科学』は鉱石ラジオやピンホールカメラ等の付録があった。その雑誌を買えば“観察と実験”という科学学習の基本を体験出来るようになっていた。戦後は『○年の科学』という雑誌がこの方式を受け継いでいたが、経営上の理由で一

科学の本とは何か

——志々目 彰——

旦廃刊になった。

『かがくのとも』という月刊絵本は読み聞かせに使えるものもあるが、基本的には実験と観察の手引である。読みつばなしで終わらせてはもったいない本である。

その上級版に『たくさんの不思議』という絵本があるが、その中で私がこれこそ学問！と感動したのは『ゾウの時間 ネズミの時間』だった。大きい動物も小さい動物もその一生で打つ脈拍数は同じという結論からは、生命、自然、人間などさまざまなことを考えさせられた。この絵本の元は同じ著者による中公新書だが、科学と哲学がひとかたまりになっているようだった。中学生で数学の好きな子なら、こちらの数式を使う証明にもっと興奮するかもしれない。こういう学問が今は絵本の形でも提供されている。科学の本は読むだけでなく観察や実験、または計測や計算を伴う人間学の本である。理系の本を「調べ学習」以上の存在として活かすには、小説好きの大人だけでは力不足だろう。学校と学校図書館の役割もそこにあるのではなからうか。



どなたさまも「注目！」教育長と面談しました

面談日＝平成二十四年二月一日

対応者＝坂倉教育長・学校教育部長・指導課長

小学生の母親ではない私が、教育委員会のトップである坂倉教育長にお目にかかるなんて、なんとも恐れ多いと思いつながら、育てる会の先輩方の後ろにくっついて庁舎の応接室に入りました。お会いした教育長は、柔和な感じの方でしたので、ようやくほっとしたのでした。

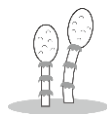
教育長は学校図書館の現状について、詳しくお話ししてくださいました。問題はたくさんあるようです。蔵書数が足りない、図書館の空調設備設置がまだ進んでいない、本に貼付したバーコードを読み取るバーコードリーダーがないために、データベース化が始まったにも関わらず、パソコンによる貸し出しができない、新しく買った本の登録がまだできない、読書推進サポーター派遣事業(学校司書派遣)がまだ一部の学校でしか行われていない(公募で現六名来年度二名増員予定)。どれもこれもお金のかかるお話で、そう簡単には解決できない問題ばかりです。学校の図書館が活発に活用されていないと予算要求も出しにくいとのことですが、でも、教育長の熱い思いが伝わってきて、教育委員会全体で学校図書館の充実に取り組んでくださっている

ことがわかりました。

「子どもたちの生きる力に本は必要です！」と教育長は強くおっしゃって、私は本当に感動してしまいました。また、「皆さんからも声を上げていって下さい！」とのことでした。

お父さんもお母さんも、みんなみんな、どなたさまも学校図書館にご注目ください。

(宮坂千佳子記)



―平成二十四年度の要望書回答からピックアップ―

・市内全校への学校司書の配置をお願いします

A 派遣校は一年ごとに更新し、嘱託員の派遣を通して教育委員会が関わりながら、市内各校の読書活動及び学校図書館の充実を進めて行くことを考えております。

・学校図書館サポート事業のさらなる充実を。

A 今年度までの巡回校では、巡回指導をきっかけに校内体制を見直したり、環境整備を行ったりするなどの成果があると考えております。：(中略)：各学校の読書活動の推進には、ボランティアの協力が必要であり、その方々への指導や支援も引き続き行います。：(中略)：現在の状況が完成されたゴールとは考えておらず、これからも、成果や課題点などを踏まえて、今後の展望を検討していきます。

(担当指導主事より回答の文書を頂きました)

八王子市内学校図書館見学会

八王子市立陶鑛小学校 八王子市立松が谷中学校

二月十二日、育てる会メンバー七人で市内陶鑛小学校と松が谷中学校の学校図書館を見学してきました。

陶鑛小学校は、昨年度重点校に続き今年度九月から学校図書館サポーターが派遣されています。創立百三十五年という歴史のある学校だけに古い本も多く、重点校になった昨年度は廃棄からのスタートだったようです。今年度は、年度途中からの週一、二回のサポーター訪問ですが、本の配置や子どもたちに分かりやすくする工夫など、細かなところに手が入るようになり、先生たちものぞいて下さるようになってきました。また公共図書館との連絡もしやすくなり今後授業での活用が期待されます。司書教諭の先生やボランティアさんたちとの連絡や意思疎通を図るため連絡ノートが活躍していました。



絵本コーナーには量が減かれています

松が谷中学校はニュータウンの中に位置する比較的新しい学校です。こちらは今年度重点校ということで見学の日も学校図書館担当指導員の方たちが、ボランティアさんたちに針金ハンガーを使ったブックスタンドの作り方の講習をされていました。松が谷中学校ではボランティアさん

(実動五人)の活躍に目を見張るものがあります。ぬいぐるみをおいたり表紙が見えるような配置を多くしたりと、子どもたちが手に取ってみたいくなるような工夫がたくさん見られました。子ども達自身のポップカードもありました。司書教諭の先生と子ども達とボランティアさんたちの共同作業でできた『知のワンダーランド』という読書案内リストは一気に子どもたちを学校図書館に引き付けたようです。できたいきさつや使い方の工夫など、熱い思いをうかがうことができました。今後、ほかの先生たちにも授業で使ってもらえるような工夫が必要だと話されていました。

最後になりましたが、お忙しい中時間を割いて見学に対応いただき、ありがとうございました。

(桑原由美記)



ぬいぐるみや面だして明るい雰囲気

国立青少年教育振興機構子どもゆめ基金助成事業

(平成二十五年度申請中)

平成二十五年度の計画は次の通りです。

七月十一日(木) 十時から 学校図書館井戸端会議2

北野市民センター

十月十九日(土) 十三時から 広瀬恒子さん講演会

「読書活動を支える学校図書館

—子どもの本を読みましよう—

八王子市中央図書館

十二月七日(土) 十三時から 堀川照代さん講演会

「読書活動を支える学校図書館

—子どもが本と出会う場所—

八王子市中央図書館

詳細が決まり次第本紙「学校図書館テイクオフ」やチラシにてご案内いたします。みなさんのご参加をお待ちしています。

この他に、会員内部での研修や市内・外の学校図書館見学会も行っています。

— 請願書その後 —

平成二十四年第四回市議会にて、『小中学校に専任司書配置を求める請願』の継続審議がなされました。請願趣旨に賛同する署名も集まっているとのこと、『学校図書館』への市民の皆さんの関心が高まっていることはうれしいことです。本会としては「人の配置」に留まらない学校図書館の充実を願い、引き続き要望書の提出や関係者との面談を続けていきます。

会員募集

正会員：…本会のすべての活動に参加できます。

入会金500円、年会費1000円です。

賛助会員：…広報紙やイベントの情報をお届けします。本会の活動を支援して下さる個人、団体の方。年会費一口1000円です。

事務局だより

今年度要望書への回答で「現在の状況が完成されたゴールとは考えておらず、これからも、成果や課題などを踏まえて、今後の展望を検討していきます。」と言っていただけたことは、私たちの今後の活動への大きなエールとなりました。

八王子に学校図書館を育てる会

(問い合わせ) 桑原 042-637-0178